

おカネ……あるじゃん！

ライター・翻訳家 板倉 克子

日本語の森をウロウロしたり、イギリス英語やフランス語という別の森と日本語の森との間をただ右往左往するだけで十年以上経ってしまった。こんなウロウロと右往左往で世間様に食わせてもらっているのが不思議でたまらないので、おカネの話がしたい。

カネの金はゴールドの金と紛らわしい。それゆえ雑誌では一般的に、「カネ」とカタカナで表記されることが多い。日本語では「マネー」とワールドに同じ二つの漢字を使い、読み方で区別しているわけだ。外国人にそう告げると、なぜか甚だしく感心されることがある。そういうエピソードがまたぞろ日本特殊論に吸い上げられて妙な理屈を聞かされてもかなわないので、そんなときは、「そーい、や韓国や朝鮮では『金(キム)』という姓がとても多いんですよ」と話題を方向転換して、逃げることにしている。



ユーロ導入で消え去りゆく欧州の銅貨。右はオーストリア。左はギリシャ。50ドラクマ白銅貨には古代アテネの政治家ソロンの横顔が刻まれている。



デンマークの5クローネ白銅貨(左)は、わが国の500円玉(右)よりひとまわりも大きい。



右はフランス。どの硬貨にも「自由、博愛、平等」の三拍子が高らかに謳われている。左はスペイン。下はベルギー。

一方、フランス語ではおカネは「アルジャン argent」で、これには「銀」という意味もある。「時はカネなり」は「時は銀なり」だし、たとえば古本を売って「カネに換える」と言いたいときは、「銀に換える」である。わが国の金融情報誌に「あるじゃん」という月刊誌があつて、このネーミングはそこから来ているはずだが、横浜弁のこの気安い感じをフランス人に伝えるのは難儀である。いくらなくとも「あるじゃん」とはこれいかに。こういうフレーズを訳してと頼まれたりすると、これまた逃げ腰になる。

英語ではどうかというと、「シルバー silver」には特におカネの意味はない。しかし、イギリス英語には「スターリング sterling」という、たいていの日本人やアメリカ人はまず知らない語があつて、これは「イギリスの通貨」と「イギ

リスの法定純度に達した銀」の両方の意味を持つ。特筆すべきはこの言葉が、「当てになる」「質のいい」「一流の」を意味する形容詞としても使われることだ。イギリス人は自国の通貨がユーロやドルよりも当てになるとたぶん信じている。だから未だにユーロ導入に気が進まないのではないか。

じゃあ、「銅」はおカネを意味するか？
英語の「コッパー copper」は複数形にすると「小銭」を表わすが、フランス語「キューイブル cuivre」の複数形は、残念ながら銅製の台所用品や楽器を指すだけで、小銭は意味しない。ヨーロッパの言葉は、



右はトルコの50リラ白銅貨。左は、内戦前のユーゴスラビアから持ち帰った5ディナーリオと1ディナーリオ白銅貨。



北欧の硬貨。デンマーク(右)、スウェーデン(左)、フィンランド(下)のうち、デンマークとスウェーデンはEU加盟国だが、ユーロは未導入。穴が開いているのはデンマークの25オーレ白銅貨。

指し示す範囲が互いに微妙にダブったり違ったりしていて興味深い。小銭といえは気になることがある。

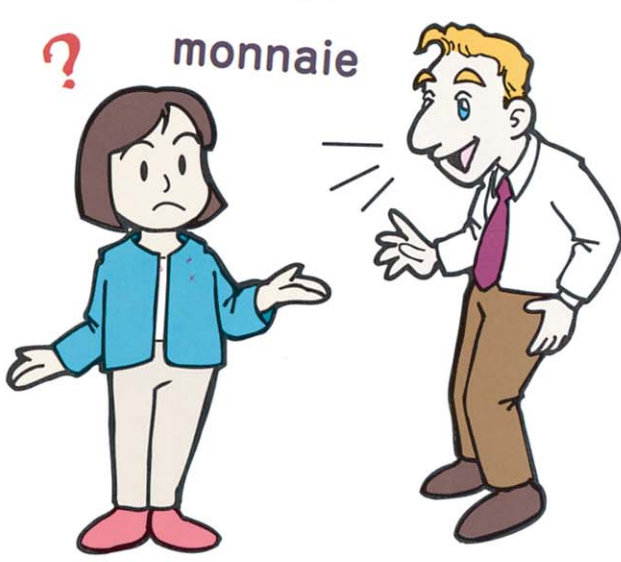
フランス語の話せるアメリカ人に出会ったら、「おカネ」ってフランス語で何て言うの？」と訊ねてみてほしい。十中八九、「アルジャン」の代わりに「小銭(モネ monnaie)」という答えが返ってくるはずだ。おそらく同じラテン語源の「マネー money」に引きずられて、つい「モネ」となるのだろう。モネは普通、硬貨を指し、細かい釣り銭、つまり英語の change や、ズボンのポケットに入っている小銭がモネに相当する。なぜか、これまでわたしがフランス語圏で遭遇したアメリカ人は、ほぼ全員、おカネといえはモネと口にした。

そんな親子が授業中、おカネの話題にふれるたびに、「バラ銭」「ジャリ銭」と連発する。そのギャップが可笑しく、ロシア人の血が四分の二混ざっているという担任のフランス人教師が二度ならず指摘しても、まるで

皮切りは、二十年ほど前、南仏エクス・プロバンスにあるマルセイユ大学の分校で、「外国人のための夏期講習」を受講したとき、同じクラスにいたアメリカ人の父娘だった。裕福そうな親子で、大学の食堂にはほとんど現れない。宿泊先も学生寮——蛇足だが、日本人はイタリア人、ドイツ人と同じ寮に入れられ、その棟は冗談で「三国同盟」と呼ばれた——ではなく、近くの別荘を借りているらしかった。月曜の朝は、「週末はコート・ダジュールで楽しみました。」などと屈託なく報告する。

直らない。クラスメートの間では、学食のテーブルでこの父娘の噂話がしばしば口端に上った。身長一九〇センチのオランダ人医学生ヨハンが「あの『バラ銭』連発は、拝金主義の裏返しかな。金持ちだって、ことを卑下してるのかもな！」と皮肉ると、ミラノから来た優等生のパオラが「謙遜するアメリカ人の出現ってわけ?! だとしたら、あの国の経済もそろそろ頭打ちってこと? まさか!」と応酬する。わたしはそうした会話についていっただけで精一杯で、まるで口を挟めなかった。フランス語での横メシ(西洋語をしゃべりながらの会食)だけでもしんどいのに、日本人としての意見を求められて、のべつ途方にくれていた。五百円硬貨の発行が始まった年の夏のこと、バブル経済の到来まではまだ少し間があった。

argent sterling
change copper money
monnaie



板倉 克子 略歴
いたくら よしこ



ライター・翻訳家
1962年神奈川県川崎市生まれ。早稲田大学第一文学部フランス文学専修卒業。
テレビコマーシャル制作会社で翻訳に携わった後1989年にフリーランスとなり、以来、出版・広告・映像・音楽などの分野で活動する傍ら、書評やエッセイも手がける。
訳書に、英国ユーモア小説の古典的名作で、荒唐無稽なサラリーマン小説『レジナルド・ペリンの転落』(デビッド・ノブズ著、マガジンハウス)、キリスト教に吸収された異教起源の

建築装飾の歴史をたどる『グリーンマン ヨーロッパ史を生き抜いた森のシンボル』(ウィリアム・アンダーソン著、河出書房新社)ほかがある。
2002年10月には、クラシック音楽家の人間的なエピソードを少年少女向けに編んだ『なんでベートーベンは怒ってシチューの血をほったか?』(ステイブ・イッサーリス著、音楽之友社)が刊行予定。月刊『東京人』(都市出版株式会社)で、ものづくりに情熱をかける技術者を取材する「匠の肖像」を連載中。